

希望学についての考察
～東日本大震災からの希望の再生～

慶應義塾大学法学部政治学科

新毛 聡一郎

<目次>

はじめに

第1章 人々は希望を持っているか —データから見る希望—

- 1節 希望の意味、内容
- 2節 希望の要因
- 3節 現役大学生の希望
- 4節 つながりという希望

第2章 希望、絶望、挫折の関係性

- 1節 挫折は通過儀礼？
- 2節 絶望と挫折

第3章 地域における希望

- 1節 希望学の研究地「岩手県釜石市」
- 2節 足を運んだ「宮城県石巻市」

第4章 希望の対象としてのスポーツ

- 1節 釜石における「スポーツ」
- 2節 震災以降における「スポーツ」

おわりに

はじめに

「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない¹。」とは、小説家村上龍氏の『希望の国のエクソダス』という作品に登場する中学生が放つ台詞である。日本は60年代の高度経済成長を経て、今やGDPでは世界第3位に食い込むほどの先進国の仲間入りを果たした。さらにはネットワークの圧倒的な普及も進み、今や「欲しいものは何でも手に入る、知りたい情報は何でも知ることができる」世界になった。一見するとそこは希望に満ちているように感じられる。しかしながら2000年代に入り顕在化してきたのが「ニート」や「引きこもり」といった社会問題である。彼らニート（NEET、学校に行かず、仕事もせず、職業訓練も受けていない状態にある人々）はいわば、「働

¹ 村上龍『希望の国のエクソダス』文藝春秋、2000年 p.309

くことに希望を失っている人々」なのではないか。「引きこもり」も、家を出た外界、社会に「希望を見出せない」状態になっているのではないかと、考えるようになった。

そんな中、2004年のアメリカの民主党大会において、ある歴史的なスピーチが話題となった。後にアフリカ系アメリカ人としては初の同国大統領となったバラク・オバマはスピーチ「大いなる希望—*The Audacity of Hope*—」をはじめとして、その後も重要な演説では必ず「希望」という言葉を組み込んだスピーチを行ってきた。

これらの事象から、著者は現代社会において「希望」が一つのキーワードであるのではないかと、声や言葉には出さないものの心のどこかで考え始めるようになってきた。そして昨年、「希望学」という学問に出会った。希望を単なる個人の所有するものだけでなく社会の問題として科学的に捉え「希望を科学する²」希望学は、自分の心の中のものもやもやを消してくれる存在であり、まさに一緒に考えていきたい学問であった。

また本稿の構想を練っている最中、2011年3月11日に東日本大震災という巨大な地震が日本を襲った。東北地方を中心に、被災した方々はこういった心境の変化があったのか。地震が希望の再生、喪失に大きく関わってきたのか。震災と希望との関係も書き記したいという思いが強くなっていった。

本稿では2005年から東京大学社会学研究所のプロジェクトとして、玄田が中心メンバーとなって研究している希望学を紹介、そしてそれに基づきながらも、自ら足を稼いで得たデータや体験を糧にした見解を導き出していく。

第1章「人々は希望を持っているか—データから見る希望—」では、先述の社会学研究所が実施したweb調査アンケートから、人々の希望の有無、希望の内容、希望を持つ要因などを詳細に検討していく。併せて著者が所属する研究会のゼミ生を対象としたアンケートの結果も紹介していきたい。

第2章「希望、絶望、挫折の関係性」では、「今までの人生で挫折を経験し、それを乗り越えている人ほど希望を持ちやすい」という仮説を基に、希望と挫折との関係性を明らかにしていく。またセットで用いられることが多い「希望」と「絶望」、一般的にニュアンスの近い「絶望」と「挫折」の差異を検討し、希望へのプロセスを考える。

第3章「地域における希望」では、希望をそれまでの「個人が持つそれぞれの願望」としてではなく「社会的な、コミュニティとしての一つの願い」の希望に注目し、そのような大きな希望にはこういった種類、特徴があるのかを考えていく。実際に、東日本大震災で被災した宮城県石巻市での現地調査、フィールドワークを行い、被災者の方とのやり取りも記していく。

第4章「希望の対象としてのスポーツ」では、社会的な希望の対象の一つになり得るスポーツにスポットを当てる。希望学が調査した岩手県釜石市におけるスポーツの役割、被災地をホームタウンとするベガルタ仙台を取り上げ、「希望の星」、「チャリティーマッチ」にも触れていく。

² 玄田有史『希望学』中央公論新社、2006年

先述した 4 つの章のそれぞれの考え、結論を基に「おわりに」とし、本稿を終えたい。最終的に本稿を読んでもらった方々に、自らが持つ希望について一度ゆっくりと考えるきっかけを与えられることが出来ればと考えている。

第 1 章 人々は希望を持っているか –データから見る希望–

1 節 希望の意味、内容

希望学プロジェクトを 2005 年から開始した東京大学社会科学研究所（通称：東大社研）は「希望の喪失」という仮定を検証するために、2005 年から 2006 年にかけて二度のアンケートによる全国調査を行った³。その結果は非常に興味深いものであったため、本稿でも紹介したい。

第一回目に行われたのは 2005 年 5 月にインターネットを通じた「職業に関するアンケート調査」であり、20 歳から 49 歳までの男女 875 名のデータを得た。第二回目は 2006 年 1 月に「仕事と生活に関するアンケート調査」を行い、こちらは 20 歳から 59 歳までの男女 2010 名からのデータという、より大規模なものとなった。

まずはじめに紹介したいのは、日本人の希望の有無についてである。

表 1-1. 希望（将来実現させたいこと、してほしいこと）の有無

希望がある	78.3%
そのうち	
その希望は実現できる、たぶんできる	80.7%
実現できそうにない、あまり実現できない	18.5%
無回答	0.8%
実現できると答えた方は、いつ実現できるか	
1～5年以内	72.3%
6～10年	21.6%
11年以上	6.1%
希望がない	21.7%

（出典）東大社研・玄田有史・宇野重規（2009）『希望学』p.132 より引用。「仕事と生活に関するアンケート調査」東京大学社会科学研究所・希望学プロジェクト、2006 年 1 月実施。以降の図表全て同様

³ 同上 p.63

日本全国でのアンケート調査を行ったところ、将来実現させたい希望の有無についてのデータが表1-1のようなものとなった。この表から一つの結論を導き出すとすれば、それは「日本人の約8割は将来実現させたい、ないし実現してほしい希望を抱いている」ということである。この78.3%という数字には次の二通りの捉え方があるだろう。約8割もの人が希望を持つことが出来ている。あるいは、約2割の人が希望を持つことが出来ないでいる。この数字が果たして多いのか少ないのか、それは受け取る人によって変わってくるのかもしれない。またこの表からは「希望を持っている」と答えた人のさらに約8割、つまり全体の約6割強が「その希望はおそらく実現できる」、また同じく約7割、全体の約6割弱が「1~5年以内にその希望は実現できる」としている。この結果に関しても、約3人に2人の人が短期的に実現可能な希望を持っている。約3人に1人の人は希望を持っていない、もしくは希望を抱いていても実現不可能な状態にある。という2通りの解釈が考えられる。

東大社研の希望学プロジェクトの問題意識は1990年代後半から騒がれてきた「失われた10年」による「希望の喪失」にある⁴。今回のような全国的な調査は今まで行われたことがなかったため、残念ながら問題意識の根源にある「この10年で希望は喪失されたのか」という事実はデータとしては証明出来ない。

表1-2. 希望を持つことの意味

a.希望がないと生きていけない	7.3%
b.希望を持つことで元気に生きていける	58.0%
c.希望を持つことで同じ目的を持つ人と出会える	15.6%
d.希望を持つだけでは意味がない	11.9%
e.希望はなくてもかまわない	3.6%
f.希望を感じることで体が甘えている	0.1%
g.その他、無回答	3.4%

次に希望を持つことの意味について集められたデータが表1-2である。これら選択肢の中では、a~cが希望を持つことに対して肯定的、ポジティブに捉えており、逆にd~fは希望を持つことには否定的、またはネガティブに捉えていると考えられる。こうして二極化させて考えた場合、肯定的に考える割合は80.9%、否定的に考える割合は15.6%となった。

希望を持っているということは必ずしも良いことなのか。そして、希望を持っていないというのは悲観すべきことなのか。これらの問いに確信を持って答えることは出来ないが、上記の表からは「希望を肯定的に捉えている人が圧倒的に多い」ということが分かる。こ

⁴ 東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望学1 希望を語る 社会科学の新たな地平へ』東京大学出版会、2009年

の「希望を持つ意味はある」という仮説から、何か希望の可能性、そして希望学の研究のし甲斐があるであろうことを著者は強く感じた。

2 節 希望の要因

前節より、日本人の約 8 割が希望を持ち、全体の 6 割強がそれが実現可能だと考えている事が分かった。では希望を持つ 8 割と持たない 2 割はどういった点で線引きが行われているのだろうか。この問いにも東大社研は全国調査により、希望の有無の決定要因について計量分析を行い、仮説を提唱している。

その結果玄田は「性別、年齢、健康、収入、就業状況」という個人属性が大きく関係しているという⁵。

・性別

男性よりも女性は希望を持ちやすく、それは特に実現可能性が高いことが多い。男性は仕事に関する希望を持っていることが多い。言い換えれば、仕事にしか希望を見出すことができないのかもしれない。また女性が仕事への希望をあまり抱いていないことは、現代における雇用機会がまだまだ均等とは言えず、家庭内における男女間の役割が固定されているということが伺える。

・年齢

20 代、30 代、40 代の希望を持っている割合はそれぞれ、80.5%、74.7%、74.3%となった。割合の変化は少ないものの、若い世代がより多くの希望を抱いていることが分かる。先が長い人生の中で、結婚や出世、家庭を持つなどこれからの可能性に期待しているのではないかと考えた。

・健康

健康状況が良好であると自己認識している人ほど、実現見通しのある希望があると答える割合が高かった。健康な人はこれからも長生きをして、自分の好きなように人生を送ることが出来るため、逆に健康状態が悪いと認識している人は自分の病気に絶望、あるいはこの先のことを考えることが難しいため割合に差が出たのだと考えた。

・収入・就業状況

年収が 300 万円未満の個人は実現可能性の高い希望を持ちにくく、逆に家族全体の年収が 1000 万円を超える世帯に属する個人ほど希望があると答えた割合が高くなった。やはり収入が多いほど手に入るもの、実現できる行為、可能性も増えるためであろう。

⁵ 同上 pp.135-137

これらの要因を一つに規定すると、それは「個人の選択可能性」だと考えられる。さまざまな選択肢の中で生きている若い人の方がこれからの人生に希望を感じているだろうし、これからの人生という意味では健康な人の方が長く生きることが出来る。収入が多い、もしくは高学歴な人の方が行為の選択肢が増え、そこから希望が生まれやすくなる。

3節 現役大学生の希望

慶應義塾大学の学生である著者は、政治学科の国際社会学のゼミ（研究会）に所属している。2011年7月に行われた本稿の構想発表の際に、聴講しているゼミ生17名に簡単なアンケートをお願いした。質問は次の3問である。

- ①あなたはこれまでの人生の中で、大きな挫折を経験したことがありますか？
- ②あなたはこれから（短期的でも長期的でも良いです）の将来に希望を持っていますか？（もし持っているならば）差し支えなければ、それがどのようなものか教えてください。
- ③②の質問であなたが定義した、捉えた「希望」とはいったいどのようなものか、教えてください。

（対象は慶應義塾大学、塩原良和研究会に所属する大学3、4年生17名）

17名という人数の少なさは、おそらく割合や確率を出すには有意な数字ではないだろう。しかしながら、貴重な意見や興味深い結果が表れたので是非紹介したい。

まず①について。この問いに「はい」と答えた人は17人中13名だった。回答者は皆20歳そこそこの大学生であることを考えると、この結果は予想を上回るものとなった。「小さい挫折ではあるが～」という書き出しから始まる回答がいくつか見受けられ、多くの学生は少なからず挫折を経験しているようである。なお、挫折と希望との関係や学生の挫折の詳細は次章で詳しく述べていく。

次に②について。この問いに「はい」と答えたのはなんと回答を頂いた17人全員だったのだ。学生の多くは希望を持っているだろうと考えていたのだが、この結果には著者は正直驚きを隠せなかった。ここで学生全員が希望を抱いている要因をいくつか考えてみたい。

・年齢

対象の学生は20～22歳がほとんどである。彼らのほとんどが翌年、ないし翌々年には社会に出ていくため、その仕事、将来に希望を感じていることが考えられる。事実、約半数の8名の希望の対象に「仕事」が挙げられている。また「まだ夢が見られる年頃だから」希望を

持てると考えている学生もおり、これも年齢による要因だと考えられる。

・健康

私たちのゼミは週一回、学校のキャンパスや、「三田の家」と呼ばれるキャンパス近辺の木造住宅の中で、教授の講義を聴くのではなく「生徒が主体的に参加、発言する」スタイルで行われている。そのためゼミ生には参加時にパフォーマンスを発揮できる最低限の体力が必要となる。そういった意味では、今回の対象となった学生は皆健康であり、これも希望の獲得の阻害要因とはならないはずである。

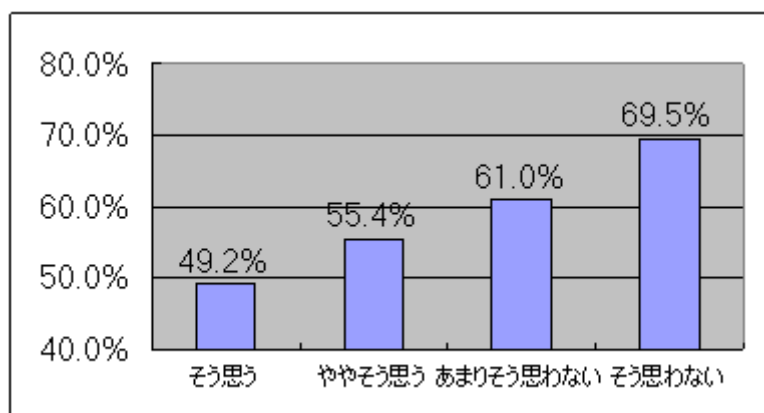
・収入・就業状況

慶應義塾大学は私立の大学であり、その学費は決して安くはない。ましてや内部進学者は小学校～高校在籍時より学費を払っているため、家庭としては一定の負担がかかる。そういった学生を持つ家庭は、ある程度の収入や生活の余裕があると考えられる。また私立トップクラスの偏差値を誇る学科だけあり、ゼミには優秀な学生が揃っている。3月に卒業を控える4年生も、そのほとんどが希望通りの進路を叶えることに成功している。よって、収入・就業状況は申し分ない条件が揃っており、これらは希望獲得の要因の一つであるといえるだろう。

4節 つながりという希望

希望獲得の要因は上記の5つには収まらない。東大社研（2009）では、家族や友人などの「他者との関係」によっても規定されるとある⁶。

図1-1. 実現見通しのある希望を有する割合（「自分は孤独だ」についての回答別）

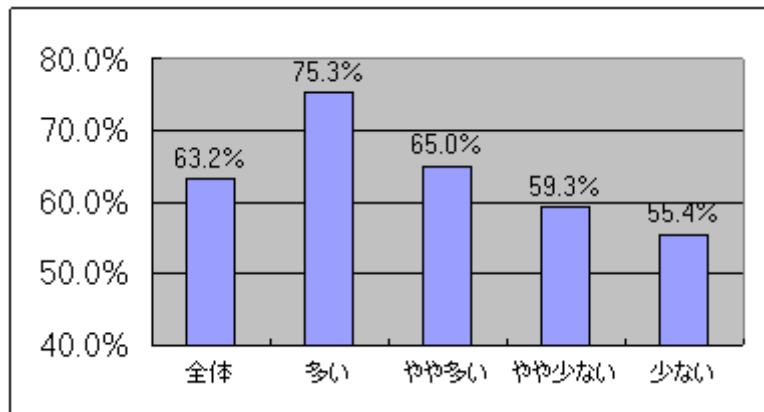


（出典）東大社研・玄田有史・宇野重規（2009）『希望学』p.142より引用。

⁶ 同上 p.143

図1-1. は自分のおかれている状況について「孤独であるか」という問いに「思う～そう思わない」の4つの選択肢別に見た、希望を有する割合を表したものである。

図1-2. 友だちの多寡別に見た実現見通しのある希望を有する割合



(出典) 東大社研・玄田有史・宇野重規 (2009)『希望学』p.142 より引用。

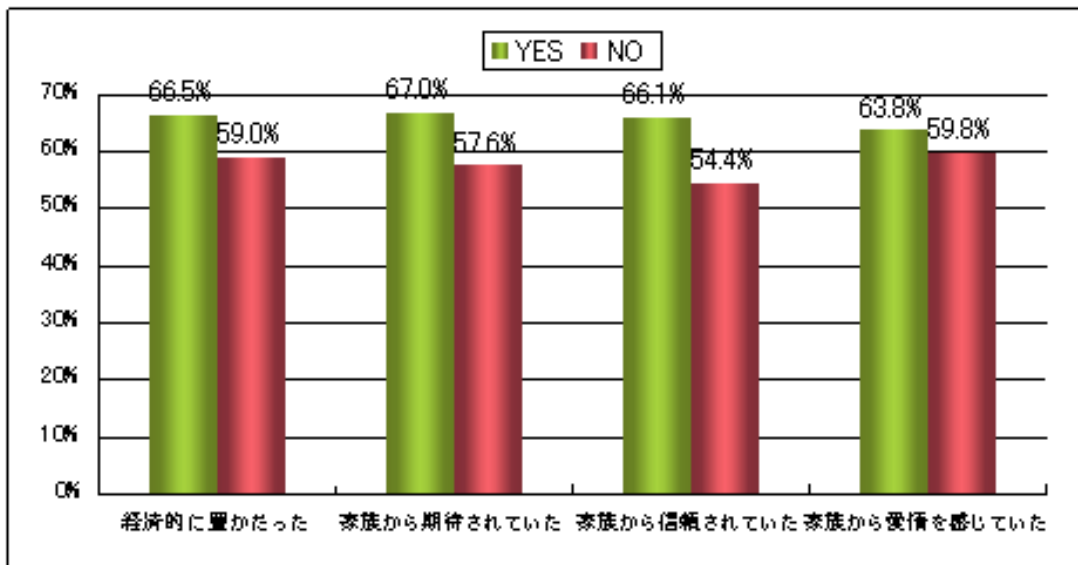
図1-2. も同様に、周りと比べた時の自らの友人の多寡を「多い～少ない」の選択肢別に見たときの、希望を抱いている割合である。

これら2つの図から、友人の多さが希望の獲得に寄与していることが分かる。いったいその理由は何なのだろうか。著者はその理由を、「友人は感情を共有できる対象」であるためだと考える。例えば親しい友人が就職したり、結婚したりした場合に、あたかも自分がそうなったかのような喜びを感じることもあるだろう。また友人の助けとなるために、自らの時間や労力を犠牲にすることもあるだろう。そうして「自分も頑張ろう」という気持ちを覚えたり、感謝の言葉を頂戴した際に、そこには僅かな希望が芽生える。友人が多いということは、こうした感情を共有できる対象が増えることになる。

また希望の有無が関わってくる他の要因として、友人よりもより距離や関係性が近い家族が挙げられている⁷。

図1-3. 子どもの頃の家族の状況別に見た実現見通しのある希望の保有割合

⁷ 同上 pp.144-146



(出典) 東大社研・玄田有史・宇野重規 (2009)『希望学』p.144 より引用。

図1-3. は、子どもの頃の家族の状況別に見た、希望の保有割合を表したグラフである。この4条件の中で、「経済的に豊かだった」の項目は家族の経済状況を反映させているが、その他の3項目は家族からの期待・信頼・愛情といった心理的なつながりを反映させていることはまず注目すべき点である。そして4条件全てにおいて、YESと答えた人がNOと答えた人よりも実現可能な希望を持っている割合が高いという結果が出た。著者はこの理由を「周囲(家族)からの信頼・期待に応えたいという思い、そしてその思いを叶えうる経済状況が存在している」ためだと考えている。幼い時期に家族から目をかけられるということは本人の自覚・自信を持つことにつながり、結果的に希望を持ちやすくなるのではないだろうか。

一方でデータへの反論の余地というものも存在する。例えば、家族からの過度な期待・信頼・愛情は本人のストレス・プレッシャーに変わってしまい、逆に希望を持ちづらい環境に追いやってしまう恐れがあるだろう。こういった希望学にとって「不利」なデータは残念ながら紹介されていない。また、「家族から愛情を感じていた」割合が、「YES」「NO」の間で4.0%の割合でしか差がないながらもこれを「家族から愛情を感じているほうが希望を持ちやすい」と安易に結論付けるのは早計であるといえるだろう。

このように、データからはある程度把握できることもあるものの、一方で一概に結論付けたり判別したりできないものもある。これがデータというものの限界であり、結論を出す前に、その差や割合にいったいどれほどの意味があるのか、今一度吟味する必要があるだろう。

しかしながら、個人の持つ希望が友人や家族など、いわゆる他者との関係、つながりによって左右されることは確かに言えることだろう。ともすれば、著者が問題意識として抱いている「希望の喪失」も、この「他者とのつながりの希薄化」が原因の一つとして考え

ることが出来る。ここで近年話題になっているのが「無縁社会」⁸という言葉である。この言葉自体はNHKが2010年に放送したテレビ番組によって生まれた造語であるが、家族や友人だけでなく、隣人や近所付き合いなどの地域コミュニティの交流が薄れてきている昨今の状況を上手く表現した言葉だと考える。先述した地域コミュニティなどの「集団の結束」というのも、希望の獲得への大きな近道ではないだろうか。

第2章 希望、絶望、挫折の関係性

1節 挫折は通過儀礼？

前章で述べた、東大社研が行ったアンケートの中にはこんなものもあった。仕事において「最初の五年に挫折を経験し、かつそれを乗り越えた経験をもつ人の中では、57.5%が仕事について希望を現在有している。一方、挫折経験者のうち、挫折を克服できなかったと感じている人では、半数弱の45.0%しか仕事の希望を有していない⁹。」

これは、就業者の挫折経験の有無、そしてそれを乗り越えたかどうかと、その後の仕事においての希望の有無との関係を表したデータである。このデータは希望の対象が仕事に限られているため、ここから何か結論を導き出すには一考の余地があるかもしれない。しかしながら、日本人にとって、最も多くの希望の関心対象は仕事であるというデータもまた発表されている。ここから「今までの人生で挫折を経験し、それを乗り越えている人ほど希望を持ちやすい」という仮説を立て、挫折と希望との関係について本章にて深く検討していきたい。

挫折、とは、抱いていた夢や希望が叶わないと悟り、打ち砕かれるような状況をさす。挫けてしまいだめになり、成し遂げるための意欲や気力をなくす意も含む。この挫折は辛く苦しいものであるし、出来れば避けて通りたい道なのかもしれない。しかし仮説を基に考えると、この挫折を乗り越えた人ほど希望を持ちやすいといった結論になる。それはいったい何故だろうか。

希望、とは、その字の表すとおりまれにしか叶わない望みである。私たち日本人は子どものときから「将来の夢」というものを意識しながら成長し、大人になってもこういった生活がしたいという理想を描き続ける。その理想どおりに人生は上手くいくものではないし、寧ろ上手くいくことの方が少ないだろう。特に子どもの頃の将来の夢においては、そのなりたい仕事に就けた人の割合は驚くほど少ない。東大社研が行った希望に関する調査の中での現在就業中の20代から40代の693名の回答から「小中学生時代の職業希望とその状況」についての調査を行った結果、小学6年生時に持っていた職業希望に就いた経験

⁸ NHK「無縁社会プロジェクト」取材班『無縁社会』文藝春秋、2010年

⁹ 東大社研・玄田有史・宇野重規編、前掲書 p.153

がある人は全体の 8.2%、同様に中学 3 年生時に持っていた職業希望についての経験のある割合は 15.1%となった¹⁰。幼い頃の将来の夢としては野球、サッカーなどのスポーツ選手、医者やパイロットなどが多く挙がるだろう。しかし実際にそれらの職業に就くにはその後の過程において狭き門を突破する必要性が生じ、才能、努力、また家庭の経済力などが求められるため、多くの人間はその夢を諦めなくてはならない時期が到来する。

それが「挫折」であり、その挫折の程度は多かれ少なかれ、希望した職業に就けなかった約 9 割の人間は経験しているものである。では、その 9 割の人間は現実を憂い挫けたままなのだろうか。多くの人々は現実の自分と向き合い、見合った職業に就いている。またそういった人々は希望を感じないまま働いているのかというと、そうでもない。仕事における希望、目的を「やりがい」と仮定した上で、こんなデータがある。「就業中の人々のうち、仕事にやりがいを感じたことのある割合は約 84.2%にのぼった¹¹。」

つまり、多く的人是は職業、仕事における挫折を経験しながらも、現在は新たな希望を有している。挫折を乗り越えたのだ。この「乗り越えた経験」というのが大きなポイントで、一度挫折を経験したことで自分と社会とのかかわり方や自分の可能性を改めて考え直す「自己分析」というプロセスが加わる。この自己分析を行うことで、過去と現在を見つめなおし将来へとつなげる事が出来るのではないか。ゆえに、挫折を経験している人ほど希望を持ちやすい、というよりも、挫折を経験している人ほどより現実的で自分に見合った希望を持ちやすい、という結論が導き出せるのではないだろうか。

前章で紹介した慶應義塾大学の学生を対象にしたアンケートでも、主な挫折の内容について次のようなものが見受けられた。

「就職活動で苦労した」「高校・大学に進学し、自分よりすごい人たちに圧倒された」「試験に失敗した」「失恋した」「海外へ行った際にへこんだ」

このように赤裸々に学生が書いた挫折の内容としては、①試験・受験に失敗したこと ②一歩広い世界へ飛び込み、その広さに戸惑ったこと の大きく 2 つに分けられる。未知のことにチャレンジしたものの失敗、もしくは困惑する。そこで挫折を味わいながらも、その経験によりまさに自分と社会との距離を上手く測り、人間として皮剥けていく。そんな成長の跡が見受けられた。また挫折について「今まで大きな挫折をすることを回避してきており、それが自分にとって良くないことだと思っている」「挫折とは自分を客観的に見れていない証拠だ」といったコメントは、まさに挫折と希望との関係の核心に触れているのではないだろうか。

2 節 絶望と挫折

¹⁰ 玄田有史、前掲書 pp.63-64

¹¹ 同上 pp.66-68

ここまでは希望と挫折の関係について述べてきたが、では絶望とはどういうことなのだろう。「抱いていた望みや期待がまったく絶たれること」を指す絶望は、一般的に希望とセットに使われる。しかし本当に、絶望は希望の対義的な概念で用いられるべきなのか。また絶望と挫折は、同様のものであると捉えてよいのだろうか。

例えばある人が「希望を持っていない」とすれば、その人は「絶望を抱いている」とするのが対義語、つまり一般的な解釈であろう。同様に別のある人が「希望を抱いている」とするならば、その人は「絶望など感じていない」ことになる。しかしながら、たとえその時点で希望を保有していなくても絶望を感じないこともあるのではないかと、逆に希望を抱いていたとしても絶望を感じることもあるはずである。希望と絶望はセットで用いられるべき言葉ではない。絶望は絶望で、希望と同様に人間が抱く独立した一つの現象というのが著者の考えである。

著者の語の解釈に偏りがあるのかもしれないが、絶望には「物事が駄目になったり辛い現実に直面することで、全てが台無しになる」ような意が含まれるように考える。これと同じニュアンスの発言を、『希望格差社会¹²⁾』著者の山田は玄田との対談の中でしている¹³⁾。絶望を経験することにより、今まで積み上げてきた努力や経験が崩れ去ってしまう。これに対し挫折は「物事に失敗したり辛い現実に直面する」という点では絶望と共通するものの、「それを糧とし、乗り越えた」ニュアンスが含まれるはずだ。たとえ失敗しても、その経験が決して無駄ではないと信じ、己と向き合うこと、すなわち自己分析を行うことが、現在の自分の存在につながるのである。絶望と挫折は、この点で大きく意味が違う。挫折とはただ単に過去の経験ではなく、過去を省みた上での現在の行動指針に繋がるものである。過去の失敗の出来事を挫折と認識することが、明日への希望へと繋がるのである。

第3章 地域における希望

前章までは希望という概念を「個人が抱くそれぞれの願望」として研究してきたが、希望は時として一個人のものではなく、社会的なものにもなり得る。一人一人がどう行動しても獲得できない希望であっても、その個人間に「つながり」が存在した場合、また同じ希望を複数の人間で共有した場合、そこには単純に $1+1=2$ ではない、大きな可能性が見えてくる。

本章からは希望を地域コミュニティというひとつの枠で考え、検討していきたい。まずは1節で東大社研が長期にわたるフィールドワークを行った岩手県釜石市について、その調査の実態と成果を紹介したい。そして2節では、著者が被災地ボランティアとして宮

¹²⁾ 山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房、2004年

¹³⁾ 玄田有史、前掲書 pp.186-187

城県石巻市を訪れた体験記を基に、地域が持つ希望について考えていく。

1 節 希望学の研究地「岩手県釜石市」

釜石の調査は、2005年から2008年にかけて、東大社研によって「希望の社会科学研究」というプロジェクトの下行われた。いったいなぜ希望学の調査が一つの地域に絞られて行われたのか。またその上でなぜ岩手県釜石市という場所がフォーカスされたのか。まずはこの二つの疑問について解消していきたい。

まず調査の対象地域を絞る必要性について。個人が抱く希望は、同じ時代を生きていてもそれぞれ違うものであるし、それは地域や社会階層によっても影響されてくる。そのため希望学では、その個人個人の希望を闇雲に調べるのではなく、対象地域を明確に絞り込み、そこで暮らす人々の持つ希望に関する歴史や現状を把握することで、希望の社会的位相に関する仮設の提示を目指した。それが結果的に地域における新たな希望の発見、地域再生につながるのではないかということである。また個人間の移動が著しい大都市圏を対象とするよりも、古い歴史を持つ地方の都市のほうが調査がしやすい。希望はときに世代を引き継ぐほどの長期的なものにもなり得るからである。

そしてそれがなぜ釜石だったのか。釜石は近代化した日本とともに、鉄の町として成長してきた。製鉄の町として発展し、ラグビーでも過去に7年連続日本一という輝かしい実績を持つ釜石は「地域の希望の星」という対象として見られていた。しかしながら製鉄業は1960年にピークを迎えるとその後は衰退の一途をたどり、1989年には最後の高炉が休止してしまう¹⁴。現在は人口も最盛期の半分となってしまう、釜石はいわゆる「挫折」を味わった。そうした産業の変化、歴史の変化といった地域社会の変容が数十年というスパンで見受けられた釜石は、希望学の絶好の調査地であった。そんな街で生活する住民の希望はどのような動きをたどってきたのか。そして現在の釜石にはどのような希望が存在するのか。こうした「地域の希望」の過去と現在を探ることが釜石調査の目的であり、本節で紹介していきたい。

1 項 釜石の歴史

釜石の成長は鉄の存在なくしては語れない。釜石には鉱山があったため、1858年に日本で初の出鉄が成功してからは鉄鉱石を用いて近代の製鉄業が盛んとなった。そして1950年には釜石製鉄所は富士製鉄という企業の傘下となることで、日本の基幹製鉄所の一つとして経済成長の大きな助けとなった。ここから製鉄は釜石の大きな特徴となり、その隆盛に

¹⁴ 東大社研・玄田有史・中村尚史編、『希望学2 希望の再生 釜石の歴史と産業が語るもの』東京大学出版会、2009年 pp.5-6

より 1960 年には実に 87511 人も人口が居住していた¹⁵。

ところが 1960 年代の基幹労働者の大規模な転出、要員の合理化により釜石製鉄所の従業員数は徐々に減少していく。さらに 1970 年には、富士製鉄と八幡製鉄が合併し新日本製鐵株式会社が発足した。この合併が独占禁止法に引っかかる形となってしまう、釜石製鉄所の主要製品であるレールの生産をストップせざるを得なくなってしまった。その後も新日鐵の合理化により釜石製鉄所は主力工場を休止した。合理化は一度では収まらず、1989 年、4 回目の合理化でついに最後の高炉も休止してしまった。こうして 2005 年の鉄鋼業の就業者は 3942 人と、1960 年ピーク時の約 3 分の 1 ほどに減少してしまった（1960 年は 11448 人）。それに伴い人口も減少している。2005 年の釜石市現住人口は 42987 人と、1960 年当時の半分以下にまでなってしまった。（1960 年の現住人口は 87511 人）

このように釜石は 1960 年をピークに衰退の一途をたどったといえるだろう。では釜石はこの「挫折」を克服できたのだろうか。かつて製造業出荷額の 9 割以上を占めていた鉄鋼は、2000 年には 26.0%の割合まで落ち込む¹⁶。しかしながら鉄鋼の代わりに台頭してきたのが機械である。この背景には、1990 年代に町を挙げて行われた企業誘致が功を奏し、金属製品や機械の出荷額が増加したという事実がある。こうして機械の出荷額が増えていく中で、製鉄業全体の好況もあり 2005 年には鉄鋼は全体の 47.5%の水準に、出荷額は 2000 年の約 2 倍にまで回復している。今や現在の釜石は「鉄と機械の町」として再生をしつつあるとあっていい。では釜石は今後完全に再生することができるのか。郊外と都市部での格差が広がっている昨今、どこまで最盛期に近い再生を見せられるかが今後の課題であろう。

2 項 再生の条件

先述した地域の再生には、地域文化と自然環境の再生が重要な役割を果たすという。自然環境や文化への愛情、いわば希望は地域を再生させる大きな原動力となる。こうした地域再生においては、ヨーロッパが先行している。ヨーロッパの各都市では、地域文化やローカル・アイデンティティの再生に多大な労力を投入しているという¹⁷。その代表的な都市が、イギリスのウェールズにあるカーディフ市である。

19 世紀から 20 世紀前半にかけて石炭積出港として栄えたカーディフは、20 世紀後半の石炭産業衰退や製鉄所閉鎖により、衰退の一途をたどる。そこから現在に至るまで、主要産業だった重化学工業からサービス産業への大転換をともなう都市再生に取り組んできた。具体的には、商店街やショッピングモールの設立、巨大スタジアムの建設、ベイエリアの再開発、各地を結ぶ道路の建設などである。こうした大規模なインフラ設備を段階的に敢

¹⁵同上 p.5

¹⁶ 同上 pp.6-7

¹⁷ 同上 pp.9-11

行した。そして 1999 年にラグビーのワールドカップを誘致し、大成功を収める。翌年もサッカーのワールドカップ戦を含む様々なスポーツイベントを開催することで、スポーツを軸に観光・商業の面で地域再生に成功している。

このカーディフ再生の要因は、大量のインフラ設備への投資といった金銭面が全てではない。市がインフラ投資やイベントについて市民との対話を重ね、長い時間をかけて徐々に産業構造の転換を進めた点にある。そうして市が成功を収めることで、市民の地域への帰属意識を高め、カーディフの自立的な地域再生につながったのである。

イギリスのカーディフと日本の釜石とを同じ物差しで測ることは難しいだろう。しかしながら、基幹産業の衰退による代替産業の確立必要性、スポーツが盛んな土地柄といったいくつかの共通点は挙げられる。このカーディフで見られた地域再生への希望やローカル・アイデンティティの再生は釜石でも果たして見られたのか。

1943 年以降徐々に生産量が減少した釜石製鉄所は、1945 年にとどめという形で艦砲射撃をくらい、生産を停止せざるを得なくなってしまった。艦砲射撃は釜石中心部を焼け野原にさせ、市役所や警察署といった行政機関のほとんどを失くした。こうした絶望からはじまった状況では、製鉄所が再開しても先行きを不安視し、退職して釜石を去ったり、漁業などの他の産業に従事する人も現れた。こうして 1958 年に新明正道らが行った総合地域調査によると、釜石では製鉄所の従業員と市民との「住み分け」が進行していた。つまり単に住んでいる場所が違うというだけでなく、勤務形態や生活水準、文化水準、さらには意識面の分断にまで及んでいたようだ。釜石の中心として支え続けてきた製鉄所だが、「廃れたら都心に出ればいい」雇われ従業員と市民との間に一時的に距離が生まれてしまった。

しかし戦時中、戦後の物資不足と天災によって、両者に生じていた格差は縮小し、釜石の再生を共有できる基盤が形成されたのである。「復興」というキーワードを軸に社会的分断をかき消し、住民の意識に「釜鉄あつての釜石」というものをたたきつけた。

また釜石の復興を支えたのは製鉄所だけではない。釜石は産業構造の変化も見据え、新日鐵や市役所が主体となって企業誘致活動を積極的に行った。その数は、1973 年から 2006 年までに実に 26 社にのぼる。誘致企業の従業員数は 2006 年当時約 2000 人であり、釜石市の製造業雇用の約半数を占める。さまざまな業種の誘致活動は、結果的に産業構造の転換に大きく貢献した。

しかしながら、誘致した 26 の企業のうち現在でも操業しているのは約半数の 14 社しかない。釜石の再生を夢見て製鉄所や市役所が奮起したものの、その企業が釜石でメリットを出し続けなければ撤退してしまい、その効果も一時的なものになってしまう。誘致企業が利益を出せるよう、市や地元企業も手を差し伸べ続けなくてはならない。釜石市が本格的な再生を目指すには、誘致企業と地元企業のネットワークの弱さ、自立する地元企業の少なさ、地域再生を目指す若い世代のネットワークの必要性といった、残された課題に立ち向かうべきだと中村（2009）は述べている。地域における希望の再生に関しても、こう

したネットワーク、つながりが大事になってくるのではないだろうか。

後述する東日本大震災は、釜石にも例外なく被害の爪跡を残した。釜石では死者・行方不明者合わせて、1073人にのぼった（2011年11月5日当時¹⁸）。しかしながら小中学生のほぼ全員、3000人が避難に成功したことは、後に「釜石の奇跡」と呼ばれるようになった¹⁹。その要因は、群馬大大学院工学研究科の片田敏孝教授が釜石市教育委員会と協力して小中学生向けに作った津波防災カリキュラムが大いに役立ったからだという。

被災した釜石はこれからの復興が望まれるが、人と人、団体と団体が協力することでまた違った「釜石の奇跡」を起こして欲しい。

2 節 足を運んだ「宮城県石巻市」

2011年3月11日、東北地方太平洋沖を震源とした大地震が日本を襲った。国内観測史上最大規模のM9.0を記録したこの未曾有の大地震は、揺れだけでなく最大波高10m以上の津波を引き寄せ、その死者・行方不明者は計2万人近くにもものぼる。この他にも液状化現象、地盤沈下、ダムの決壊など被害は甚大で、東北地方を中心とした被災地は避難生活を余儀なくされてしまった。そんな被災地を一刻も早く復興させたいという思いから、震災直後から「被災地ボランティア」活動が本格化した。

著者も震災から約半年が経過した9月末、ksvn（かながわ災害ボランティアネットワーク）というボランティア団体の主催するバスツアーに参加し、宮城県石巻市への被災地ボランティアを行った。ここからの文章は体験記、手記形式で進めていく。どうかご理解いただきたい。

この日は往路の夜行バスが金曜から土曜にかけてだったためか参加された方も多く、バス3台100人規模の大所帯であった。参加者は男女偏りなく下は20代から、上は70代まで幅広い年齢層で、私はほぼ最年少のメンバーだった。

バスでの移動中は隣になった30代男性と会話を楽しんだ。彼はこのボランティアへの参加が6回目。彼だけでなく団体の多くのメンバーがこのボランティアを複数回経験している。ボランティアや支援に必要な「継続性」の大事さを改めて感じさせた。彼は小学校の非常勤講師をしており、子どもたちにニュースなどでは垣間見ることの出来ない、現場の

¹⁸ 【東日本大震災】「釜石の奇跡」を検証 MSN 産経ニュース

<http://sankei.jp.msn.com/affairs/news/111105/dst11110506560004-n1.htm>（2012年1月13日アクセス）

¹⁹ 「釜石の奇跡」に学ぶ 来月11日、橿原で講演会 MSN 産経ニュース
<http://sankei.jp.msn.com/region/news/120113/nar12011302080004-n1.htm>（2012年1月13日アクセス）

「リアルさ」を伝えていきたいのだという。また自身の参加が6回目だという点について「義務感で参加しようと思ったことなど一度も無い。現地でボランティアをすることで被災者の方々から直接お礼を言ってもらえることもある。そうして現地の方に喜んでもらえることで、自分の手間や苦労も喜びに変わる。そんな気持ちを持った人がこの団体には多くいるし、そうじゃないと務まらないよね。」と笑顔で語ってくれた。

そうしている間にバスは朝方に石巻に到着した。そこには、盛んな漁業で栄えていた港町としての面影は無かった。震災から半年経った今も、街は壊滅的な状況だった。道路はかろうじて開通しているものの、信号は灯っていないところが多く、道の両側には瓦礫がうず高く積まれている。また沿岸部では、津波で壊れてしまった何百台もの車がクレーンによって、皮肉にも綺麗に積まれていたのが印象的であった。ボランティア活動を行う前に、市役所前に建てられた「がんばろう、石巻」という碑の前で黙祷を捧げた。きっと数え切れない人が地震と津波によって命を絶たれたのだろう、家々があったであろう市役所の周りには、驚くほど何も無かった。乾いた風が寒さを感じさせる季節になり、これからの被災者の生活はより過酷を窮めるだろうと思うと胸が痛かった。

この時期の私たちの主なボランティア活動は、津波によって住宅街の側溝にたまっている汚泥、ヘドロの除去であった。一つ何十kgもの重さの蓋を特殊な機械を使って持ち上げ、泥水で溢れている側溝から大きなシャベルを使って汚泥をかき出す。それをひたすら土嚢袋に詰め処分し、移動させた蓋を再び元に戻すという、言ってしまうと単調な作業の繰り返しである。しかしながらこの作業を行わないと、雨が降った際など後々下水道が機能しなくなってしまう。また側溝の水が氾濫した場合、その地域の衛生面にも不安が残る。労力を消費する割に地味な作業ではあるが、私たちはその重要性をかみ締めながら作業を行った。

私たちは作業を石巻の湊小学校を基点に進めていったが、作業が進み小学校を少し離れた地点に行くと、お手洗いへ行くために学校へ戻るという手間がかかるようになってしまった。そんな折、作業地区の近所（この辺りはやや沿岸部から離れていたため、津波の被害をある程度受けているものの生活を続けている家庭も多かった）の方のご厚意により、その方の家庭のお手洗いを使わせていただくことが出来た。そして私もそのご厚意に預かり、休憩中お手洗いを使わせていただくことにした。その家庭は日中祖母と孫二人の三人で生活しているようで、震災の被害を感じさせないような和気あいあいとした雰囲気を感じられた。玄関へ入ると、待っている間に温かいお茶と名産品のかまぼこをご馳走になった。前の方が用を済ませ2階のお手洗いに向かう途中、1階の居間の光景が目飛び込んできた。そしてそれは簡単に忘れられるものではなかった。なぜならそこには、柱以外何も無かったからだ。家具や電化製品はもちろん、床もむき出しになっており、生活感は全く感じられなかった。祖母曰く、1階の床から2mほどの高さまで浸水してきたという。海から大分離れたこの地にもそれほどまでの津波が襲ったという事実は、自然の恐ろしさを物語っていた。しかしそんな恐怖にも屈することなく明るく過ごしていたこの家族が、私に

はとても印象的だった。そして別れ際の「毎日この辺りにボランティアの方が来ていて、私たちはとても勇気付けられています。東京の人たちと一緒になれば、きっと東北は元通りになるわ。」という言葉にはたくさんの意味がこめられているのだと感じた。

被災地ボランティアは震災から半年が経って参加した当時も、そしてもうすぐ一年が経とうとしている現在も未だ続いている。一回のボランティアでは活動時間も短く、一人が出来ることは限られている。しかしながら、それが何百人何千人という規模で毎日行われれば出来ることも大きくなっていく。これがボランティアをすることの意義なのだと感じ取った。そして地域という大きな視点で考えてみた場合でも、首都圏という地域が東北という地域に手を差し伸べる、助け合う感覚、これこそが希望の再生に大きく寄与していると考えている。

第4章 希望の対象としてのスポーツ

地域再生にスポーツを活用する動きは、全国でも決して珍しいことではないという。本章では個人単位で、また地域としてもしばしば希望の対象となるスポーツに注目し、スポーツが果たせる役割、可能性について考えていきたい。

1 節 釜石における「スポーツ」

前章で述べた釜石も、1959年の「新日鐵釜石製鉄所ラグビー同好会」をきっかけにラグビーが盛んな街として知られている。この同好会はやがて専門部となり、新日鐵釜石は1979年から1985年にかけて、日本ラグビーフットボール選手権大会において7連覇という輝かしい成績を残した。この活躍により、釜石という地域は一躍全国区となった。

この新日鐵釜石がこれほどまでの強さ、そして人気を誇ったのには、いくつかの際立った特徴があったと宮島は指摘する²⁰。

まず第一に、地元高卒選手を積極的に採用し鍛え上げることで、強いチームを作っていたということ。いわば「生え抜き」選手の存在である。地元からより多くの応援を得るためには、同郷の選手を獲得することがファンの共感を得ることが出来るからである。

第二には、アマチュアリズムを徹底したこと。会社の名前を背負ってプレーしている以上、選手は常に仕事とラグビーの両立が求められた。どちらも手を抜くことなく取り組む

²⁰ 宮島良明「スポーツによる地域再生の可能性 釜石におけるラグビーへの期待と現実」東大社研・玄田有史・中村尚史編、『希望学3 希望をつなぐ 釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会、2009年 pp.121-122

ことが、好感をもたれることにつながったのだろう。

第三に、プレースタイルとして「先進的」なラグビーを展開したこと。イギリスで用いられていた最先端の練習方法をいち早く取り入れ、また当時主流だったボールを持ったらとにかく前を突くという「突進型ラグビー」ではなく「つなぐ、展開するラグビー」を志向したこと。チームプレーを重視することで、連帯感が生まれることにつながった。

こうした特徴が「新日鐵釜石」の人気を集めた。その釜石という街を越え、岩手県、東北地方、全国へと広まっていった。それは「東北の厳しい環境でも中央（都会）にも勝てるんだという気持ち²¹」に共感する人が多かったからだと言われている。それはつまり、弱者が試行錯誤を繰り返し強者を倒す「ジャイアントキリング」と同じようなものではないだろうか。またチームが全国で活躍するほど「おらほ（私たち）のチーム」という意識が高まり、釜石市民、岩手県民の「自慢」「誇り」となっていた。都心の大学で活躍する有名選手ではなく、地元の無名高卒選手を獲得し、最先端の練習・戦術を用い、「中央」に勝ち進んでいく新日鐵釜石は一種のサクセスストーリーを構築し、地域の「独自性」を再認識させたと宮島は述べている。

ところが新日鐵釜石は 1985 年以降低迷をきわめる。そして 2000 年、ついに入れ替え戦に破れ下位リーグへの降格が決まった。そしてそれと同時期に新日本製鐵が単独運営をやめる方針を打ち出し、新しいクラブチーム「釜石シーウェイブス RFC」へと生まれ変わった。これはつまり地元企業や地元自治体などとの共同運営を目指し、チームを広域クラブ化するということである。かつての「強く・愛されるトップチーム」新日鐵釜石ではなく、地域で作り上げ「ラグビーを中核としたスポーツタウン」が地域の「活力向上と地域振興」に貢献する役割を果たす。これは当時、全国に先駆けた挑戦であった。結果この活動は、国が推し進める「総合型地域スポーツクラブ」の目的とも合致し、2002 年 6 月には国のモデル事業にも指定された。

近年その人気伸び悩んでいるといわれているラグビーだが、釜石市民はこれをどう見ているのだろうか。東大社研は「希望学・釜石調査」において釜石地区にある 4 つの高校の同窓会に協力を仰ぎ、2007 年に約 2500 人にアンケート調査を行った²²。

その結果、ラグビーに興味・関心を持っている人が全体の 28.3%、704 人いることが分かった。

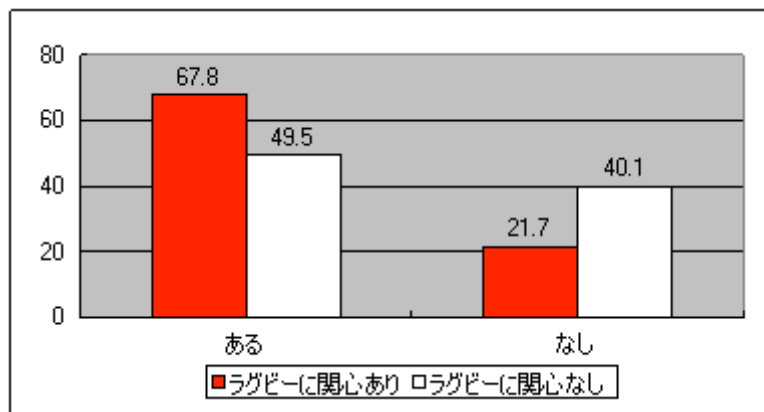
また下図の図 4-1. はラグビーに興味、関心を持っている／いない人別に見た「釜石に希望を持っている／持っていない」人の割合を表したグラフである。これを見ると、ラグビーに関心を持っている人の約 7 割が釜石に希望を持ち、逆に希望を抱いていない人は

²¹ 読売新聞盛岡支局編、『V7 の栄光よ再び——釜石ラグビー物語』熊谷印刷出版部、p.161 において、高橋善幸氏（当時釜石シーウェイブス RFC・チームディレクタ、元新日鐵釜石・監督、主将）の言葉として紹介されている。

²² 東大社研・玄田有史・中村尚史編、『希望学 3』（前掲書） pp.131-134

約 2 割しかいないことが分かる。ラグビーに関心を抱いていない人を見た場合、希望の有無にそれほどの変化が見られないため、このグラフからは「ラグビーに関心がある人は釜石に対しての希望を持ちやすい」といえるだろう。

図 4-1. 釜石に希望がある／ない人の割合 (%)



(出典) 同窓会アンケートの調査結果より宮島作成。東大社研・玄田有史・宇野重規 (2009)『希望学(3)』p.132 より

それはなぜだろうか。宮島は、誇りは過去の実績から、希望は未来への期待から導き出されるとするならば、釜石のラグビーはまさに両者を兼ね備えた存在であるからだと指摘する。

釜石シーウェイブスはクラブ化にあたり、いくつかの問題にぶつかった。例えば、それまで新日鐵釜石がそれまで参戦していた「東日本社会人リーグ」への参加は、協会の規約により単一企業チームに限られていたこと。この問題を市民私設応援団の署名運動という形で解決させた釜石市民の力があったからこそ、現在のクラブが存在する。またクラブを応援・サポートする新しい動きが地元行政・企業・市民から続々と寄せられているという。こうした動きは、地域社会にかつての活気を取り戻そうとする市民の力なしでは語ることが出来ない。そしてその市民のモチベーション、希望の対象は、スポーツだということが断言できる。

このように、釜石にとってのラグビーは地域再生への大きな一歩であり、パイオニアとなるべき存在である。そして抜け出した後は基点となり、ローカル・ネットワーク形成の要としての役割も期待されている。

次節で詳しく後述するが、震災からの復興において、スポーツが持つ力は非常に大きい。釜石ラグビー、シーウェイブスの貢献というのも例外ではない。

震災で被害を受けたチームは活動を一次休止せざるを得なくなった。地域の法人・個人会員的大幅な減少が見込まれたものの、5月には「新日鐵釜石」のOBらが支援組織「スクラム釜石」を発足、クラブ支援の輪は全国に広まった。その結果、個人会員は2000人弱か

ら 3000 人へ、法人サポーターは 450 社、ジャージーのロゴスポンサーマークも 4 社増え、年間活動費を賄うことに成功した²³。

そんな釜石は現在、2019 年に日本で行われるラグビーW 杯の同市開催を画策している。現実に、釜石市議会は 2011 年 12 月 22 日、W 杯誘致を盛り込んだ「復興まちづくり基本計画案」を可決した²⁴。実現させるにはスタジアムの建設や大会運営など課題も多いが、市民や関係者はラグビーの伝統が強いこの地で開催されることが復興のシンボルになると考えている。いわば、釜石でのラグビーは市民の「希望の源」であるといえるだろう。

2 節 震災以降における「スポーツ」

3 月 11 日の東日本大震災によって、日本のスポーツ界も大きな変化を求められた。メジャーなスポーツで挙げると、サッカーJ リーグは 3 月 12 日開催予定だったリーグ第 2 節が約 40 日遅れた。またプロ野球も節電の影響で、9 回以降は時間によって試合を切り上げる「3 時間半ルール」を採用した。本節では被災地をホームタウンとするチーム、J リーグのベガルタ仙台に注目したい。

ベガルタ仙台はもともと J1 の常駐チームではない。昨年 7 シーズンぶりに J1 に昇格したものの、10 勝 15 敗 9 分と負け越し、順位は 18 チーム中 14 位。J1 の残留争いは最終節まで持ち越されるほどの接戦だった。

そんなベガルタに、天災が襲い掛かる。それはリーグが開幕してからわずか 6 日後のことだった。ベガルタがホームグラウンドとするユアテックスタジアムは損傷が激しく立ち入り禁止となり、クラブハウスも崩壊した。震災で負傷した選手はいなかったものの、避難生活を余儀なくされる選手もいた。特に 2011 年、日本代表にも選出されたこのクラブ生え抜きの関口訓充選手は、物資不足の関係もあり数日間はカップ麺でしのぐ生活だったという。チームはしばらく練習を中止、選手はやむなく自宅待機していた。

震災から 2 週間以上経った 3 月 28 日に練習は再開したものの、練習よりも地域のボランティアに多くの時間を費やした。ボランティアは避難所への物資の運搬、壊れた家屋の片付け、瓦礫の運び出し、子どもたちとのサッカー交流などが、被害の大きかった若林区や石巻市で行われた。後に他クラブの協力を得て練習を本格化することはできたが、選手た

²³ ラグビー：釜石シーウェイブス 震災を乗り越えて闘う 毎日 j p（毎日新聞）
<http://mainichi.jp/enta/sports/general/rugby/news/20111222k0000e050194000c.html>
(2012 年 1 月 13 日アクセス)

²⁴ 【震災とスポーツ】復興のシンボルに W 杯を 釜石シーウェイブス MSN 産経ニュース
<http://sankei.jp.msn.com/region/news/111222/iwt11122222530000-n2.htm> (2012 年 1 月 13 日アクセス)

ちのコンディション作りやメンタル面は想像以上に困難だったはずだ。

しかしながら再開後初戦を逆転勝利で飾ると、その後リーグ戦 12 試合連続無敗という J1 の新記録を更新する快挙を成し遂げた。それ以降も一時は不調に陥ったものの秋に巻き返しを図り、最終的には 14 勝 14 分 6 敗、勝ち点 56 の 4 位という健闘ぶりを見せた。スポーツライターの相沢はこの快進撃を次のように語っている²⁵。

いいところを見せてやろうと個人プレーに走る選手もいなければ、誰かに頼ろうというプレーも見られない。勝利という目的のために、各ポジションの選手がやるべきことを精一杯やっているという感じなのだ。また、相手選手とはボールに対する執念で勝っている。マイボールを相手に簡単に奪われることはなく、取られても必死で取り返そうと走る。それも複数の選手が連動している。月並みな表現だが、選手の気持ちが一いつになっているのだ。ベガルタの選手は震災後、再集合してまずボランティア活動をした。被災地の惨状を目の当たりにし、つらい状況にある被災者とも接した。選手は被災者と悲しみを共有したのだ。地元仙台、広くみれば東北の人たちに支えられているクラブに所属するプロサッカー選手として何ができるか。そんな経験を通して、自分の存在理由を考えたに違いない。そして、できることはプレーで地元を元気づけることだと結論を出したはずだ。そのために最もいいのは勝つことだが、もし勝てなくても、負けるところは見せたくないと思っただけではないだろうか。

実際に震災は選手のプレーにどう影響を与えたのだろうか。先ほども述べた、チームを代表する生え抜き選手で2011年には日本代表にも選出された関口選手は自身のブログで「避難所で出会った人達の思いも一緒に練習して試合に臨みたいって気持ちを持てた」と述べている²⁶。今季チームのキャプテンを務めた、元日本代表柳沢敦もインタビューの中で「(仙台は)地域に支えられながら育ってきたクラブであり、Jリーグですから、今度はみなさんを支えてあげられるような存在になっていなくちゃいけないと思います。」と述べている²⁷。

選手一人一人が、今の自分に何ができるのかを考える。そして多くの選手が、被災者・被災地のために全力でプレーすることが自分に出来ることだと考えている。この「被災者・

²⁵ 相沢光一 Diamond online Sports セカンドオピニオン

<http://diamond.jp/articles/-/12800> (2011年12月26日アクセス)

²⁶ 関口訓充 ブログ Route du monde

<http://ameblo.jp/kunimitsublog/day-20110402.html> (2011年12月26日アクセス)

²⁷ 被災地に希望を ベガルタ選手の誓い スポーツナビ+

<http://www.plus-blog.sportsnavi.com/gekisaka/article/1078> (2011年12月26日アクセス)

被災地のために」プレーするということが非常に重要な問題であり、これが見ている人の心に届くと、選手たちはその人々の「希望の対象」となり得る。いわば、「希望の星」ともいえる存在である。同郷の選手、拠点を世界に移している日本人選手など自らにとってのそれぞれの「希望の星」が活躍することで、自分も負けてられない、明日から頑張ろうという活力・モチベーションにつながっていく。柳沢のインタビューでの「ベガルタ仙台を今まで応援して下さった方々は、僕たちが頑張ることによって、これからのエネルギーを生み出せるようになってもらえればと思います」という発言には、こうしたプロセスが含まれているのではないだろうか。

少し話が逸れるが、スポーツにおける「チャリティーマッチ」が果たす役割というものも非常に大きい。

2011年は震災の影響もあり、全国でたくさんのチャリティーマッチが行われた。行われるスポーツもサッカー・野球・ラグビー・テニスなど多岐にわたる。ここではその中でも集客や反響の大きかった2つのチャリティーマッチを紹介したい。

一つは、2011年12月23日に仙台のユアテックスタジアムにて行われたクリスマス・チャリティーサッカーである。この試合ではJAPANスターズ対東北ドリームスというチームで戦われた。JAPANスターズには日本代表香川真司や内田篤人といった海外で活躍する日本人選手がメインのチーム、対して東北ドリームスは岩手県出身の元日本代表小笠原満男や元仙台に所属した佐藤寿人など、東北に所縁のあるメンバーで構成されたチームで戦うというドリームマッチが行われた。選手らは試合後のインタビューで、イベントを慣例化させ、今後も復興に力を入れるべき岩手・福島・宮城でチャリティーマッチを開催する考えを示した。ちなみにこの試合はJリーガーが加盟する日本プロサッカー選手会が集めた義援金で開催されたもので、観戦料は無料、約1万4千人が招待された。リーグ戦が終了してからという事情もあり、震災から9ヵ月後のチャリティーマッチとなったが、「絶対に忘れてはならない」「継続性を大事にする」という観点から考えると、この時期の開催は決して間違いではなかったと思われる。

もう一つは、2011年3月29日に大阪長居スタジアムにて行われた、東北地方太平洋沖地震復興支援チャリティーマッチである。「がんばろうニッポン!」をスローガンに、「サッカーを通じて、被災者の皆さんの支援と復興の力になれるように、サッカーファミリーの情報と情熱をひとつに集め、共有する場」がつくられた。この試合はSAMURAI BLUE日本代表対TEAM AS ONE Jリーグ選抜で行われた。スタジアムには4万613人ものサポーターが詰めかけ、ピッチ上で全力のプレーをする選手とともに、被災地に向けてのエールを送った。この試合はテレビでも放映され、電話による義援金の受付も行われた。

そして全国が注目したこの試合で得点を記録した三浦和良選手のゴールシーンは、何より特筆すべきことだろう。Jリーグで最年長、44歳の三浦選手がゴール後、自身のアイデンティティともいえるカズダンスを披露、その突き上げた震える右手に感動を覚えた視聴

者はきっと著者だけではないはずだ。「衰えを感じつつ苦しみながらも現役を続行している三浦選手が頑張ってプレーし、活躍している…私もまだまだ頑張らなければ。」彼こそ、希望の星の象徴ともいえる存在ではないだろうか。

以上、大きなチャリティーマッチを紹介したが、まとめるとチャリティーマッチには大きく2つの役割が挙げられる。

①観客（テレビ観戦している視聴者も含む）目線でスポーツを行う。観客が楽しめるプレー、感動するプレーをすることで、人々の「希望の星」の対象となる。

②義援金を集める。その方法は、チケット代やスタジアム内での募金、テレビやオンラインでの募金、選手からのサイン入りプレゼントをオークション形式で販売するなどさまざまである。なお、被災地でチャリティーマッチを行う場合には原則チケット代は無料の場合が多い。

上記の役割を鑑みた場合、震災、だけでなく希望の喪失には「チャリティーマッチ」というイベントが非常に大きな効果をもたらすと考えられる。

おわりに

以上の4章から、個人の持つ希望、挫折や絶望、社会的な、地域の持つ希望、希望のツールであるスポーツについて考えてきた。本章ではそれらをまとめ、「おわりに」としたい。

本稿を大きな視点で考えてみると、著者にはひとつのキーワードが浮かんできた。それは「つながり」である。個人の持つ希望は、友人や家族などの他者との関係によって規定される。社会的な希望においても、市や地域に根ざした企業の成功や再生によって規定されることが分かった。またアスリートが地域に密着してプレーをすることで、地元の人々の希望の星となり得ることも分かった。

さて財団法人日本漢字能力検定協会が毎年発表し、ニュースにもなっている「今年の漢字」に、2011年は「絆」という漢字が選ばれた。大規模な災害の経験から家族や仲間など身近な人々との絆を感じたことが選出理由にあたったようだ。震災に見舞われた2011年は文字通り「絆（つな）ぐ」ことの重要性に人々が気づく年であった。

さらに、著者が先行研究として紹介してきた「希望学」の研究者、玄田と宇野は震災後、7月23日付の朝日新聞において「復興において大事なことは、いかに希望を共有できるか。希望は中央や国、政治が与えるものではないので、一人一人の住民の中にある希望の種を若い人や女性の声もつないで、新しい動きにしないといけない。」と、住民一人一人の意思とつながりが大事だと述べている。

1章で述べたように、今日の日本は「他者とのつながり」が希薄化している。つながりがなくなった人は、社会から抹殺されていく。彼らを放っておくと、社会全体の問題となり、日本もうまくいかなくなる。被災者を含めた「つながりをなくした一人では希望を再生できない人」に手を差し伸べられるのは、ほかでもない私たちなのである。希望を持っている私たちが彼らと「つながる」ことを意識して希望を共有し、被災地に希望をもたらすことができれば、日本にも暗いニュースが流れなくなる日が来るかもしれない。

参考文献

東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望学1 希望を語る 社会科学の新たな地平へ』東京大学出版会、2009年

東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学2 希望の再生 釜石の歴史と産業が語るもの』東京大学出版会、2009年

東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学3 希望をつなぐ 釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会、2009年

東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望学4 希望のはじまり 流動化する世界で』東京大学出版会、2009年

玄田有史『希望学』中央公論新社、2006年

山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房、2004年

村上龍『希望の国のエクソダス』文藝春秋、2000年

豊泉周治『若者のための社会学 希望の足場をかける』はるか書房、2010年

都筑学『希望の心理学』ミネルヴァ書房、2004年

読売新聞盛岡支局編、『V7の栄光よ再び——釜石ラグビー物語』熊谷印刷出版部

東京大学社会科学研究所 希望学プロジェクト「希望学」

<http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/hope/hopology.html> (2011年9月21日アクセス)

【東日本大震災】「釜石の奇跡」を検証 MSN産経ニュース

<http://sankei.jp.msn.com/affairs/news/111105/dst11110506560004-n1.htm> (2012年1月13日アクセス)

「釜石の奇跡」に学ぶ 来月11日、橿原で講演会 MSN産経ニュース

<http://sankei.jp.msn.com/region/news/120113/nar12011302080004-n1.htm> (2012年1月13日アクセス)

相沢光一 Diamond online Sports セカンドオピニオン

<http://diamond.jp/articles/-/12800> (2011年12月26日アクセス)

関口訓充 ブログ Route du monde

<http://ameblo.jp/kunimitsublog/day-20110402.html> (2011年12月26日アクセス)

被災地に希望を ベガルタ選手の誓い スポーツナビ+

<http://www.plus-blog.sportsnavi.com/gekisaka/article/1078> (2011年12月26日アクセス)

ラグビー：釜石シーウェイブス 震災を乗り越えて闘う 毎日.jp (毎日新聞)

<http://mainichi.jp/enta/sports/general/rugby/news/20111222k0000e050194000c.html>
(2012年1月13日アクセス)

【震災とスポーツ】復興のシンボルにW杯を 釜石シーウェイブス MSN産経ニュース
<http://sankei.jp.msn.com/region/news/111222/iwt11122222530000-n2.htm> (2012年1月13日アクセス)